

第 166 回東邦医学会例会 予稿集

令和 7 年 6 月 16 日(月)

A. 研修医発表

1. 抗菌薬治療に反応性の乏しかったマイコプラズマ肺炎の 1 例

石井 俊哲（研修医）

指導：佐藤 高広（総合診療内科）

25 歳女性が発熱と咳嗽を主訴に受診。非定型肺炎スコア 5 点、咽頭拭い multiplex PCR でマイコプラズマ陽性となりマイコプラズマ肺炎と診断した。初期治療として ABPC/SBT、AZM を投与するも肺炎像は悪化。入院 5 日目 AZM を MINO へ変更しステロイド投与を追加した。マイコプラズマ肺炎治療において、抗菌薬不応例や重症化例では血清 LDH 値を参考にステロイド投与を考量する可能性が示唆された。

2. 髄膜炎を繰り返し Mollaret 髄膜炎も鑑別に挙げた症例

渡辺 りさ（研修医）

指導：山田 篤史（総合診療内科）

Mollaret 髄膜炎とは、1994 年に報告された良性の再発性無菌性髄膜炎で、多くは単純ヘルペス 2 型感染による。HSV-2 髄膜炎の再発率は 30% 程度である。今回、無菌性髄膜炎の既往のある女性が、HSV-2 が陽性となり Mollaret 髄膜炎が鑑別に挙がる症例を経験した。無菌性髄膜炎患者では、HSV-2 を検索することで Mollaret 髄膜炎を発見し、再発について考慮することができる。

3. 多発骨髄腫治療中にサイトメガロウイルス網膜炎を発症した一例

松本 有祐（研修医）

指導：永田 有司（眼科）

サイトメガロウイルス網膜炎は、HIV 感染や移植後などの細胞性免疫低下患者に発症し、進行すると不可逆的な視力障害を来す重篤な疾患である。治療はガンシクロビルやバラガンシクロビルによる全身投与や眼内注射を組み合わせ、免疫状態の改善と併行して行う。視覚症状出現時の迅速な眼科受診と、HIV 感染や移植後などの細胞性免疫低下患者に対する定期的な眼底検査のフォローが必要。

B. プロジェクト研究報告

4. Time-lapse imaging system を利用した胚の形態的及び動態的指標による新たな胚評価法の確立

米山 雅人（産科・婦人科学講座・生殖内分泌分野）

本研究は、生殖補助医療において、受精卵(胚)の移植による着床及びその後の妊娠維持に向けて、より高精度な新たな良質な胚を選別するための評価法の確立を目的とした研究である。現在、胚の評価は主に凍結前の胚の形態的評価で行うが、我々は先行研究で凍結胚の融解後の再拡張不良(収縮)状態が ART 成績へ負の影響を及ぼすことを示し、胚の動態的な評価の指標を提示した。本研究ではさらに受精から凍結、さらには融解後までの胚の動態を Time-lapse imaging system を用いた連続観察を行うことで、胚の凍結前および凍結融解後の動態パラメーターを解析し、縦断的かつ多面的な胚の評価法を確立する。この新たな胚評価法の確立により、質の高い生殖医療の提供が可能となることが期待される

5. 環境からのファージ分離とファージセラピーの実用化：肺炎桿菌に対する新しいアプローチ

長島 俊介（生体応答系微生物・感染制御学）

Klebsiella pneumoniae に対する新規ファージを下水から分離し、広域ホストレンジを有するファージを同定した。現在、これらの形態学的・遺伝学的特徴を明らかにするとともに、温度・pH に対する安定性評価を進めており、その成果を報告する。

C. プロジェクト研究報告

6. TGF- β シグナル非依存性上皮間葉転換(EMT)により発生する去勢抵抗性前立腺癌の治療法の解明

堀 俊介（生理学講座細胞生理学分野）

前立腺癌に対するアンドロゲン阻害治療の過程で発生する去勢抵抗性前立腺癌の中で、double-negative 前立腺癌(DNPC)は、特に予後不良である。今回我々は、androgen 受性前立腺癌細胞株から DNPC 様の表現型を有する細胞を樹立し、その発生には TGF- β シグナル非依存性の上皮間葉転換が関与していることを見出した。また DNPC 様細胞に対する特異的治療法として MEK 阻害の有効性が示唆された。

D. 医学研究科推進研究報告

7. 新時代の大腸がん検診－大腸内視鏡検査導入への期待

松田 尚久 教授（医学部内科学講座 消化器内科学分野）

現在、日本の対策型大腸がん検診では便潜血検査が第一選択であるが、大腸内視鏡検査（TCS）の導入に向けた検討が進んでいる。国内外で進行中のランダム化比較試験や基礎研究の成果を紹介しつつ、TCS 導入による死亡率減少効果の可能性や、対象者選定、精度管理、医療資源の確保といった課題を整理し、今後の実現に向けた展望を考察する。

E. 柴田洋子奨学助成金 受賞講演

8. Analyses of the onset mechanisms of cardio-stimulatory action by aciclovir

後藤 愛（薬理学講座）

抗ウイルス薬 aciclovir (ACV) の心刺激作用の機序を検討した。イソフルラン麻酔犬において、ACV は陽性変時・変力・変伝導作用を示し、その作用は β_1 受容体遮断薬 atenolol により完全には拮抗されなかった。ACV はウシ心臓由来 PDE1A を阻害し、ラット心房組織の洞結節自動能と cAMP 濃度を上昇させた。ACV の心刺激作用には、PDE 阻害活性が関与することが明らかになった。

G. 大学院生研究発表

10. 大動脈弁狭窄症における心機能および血管弾性能 Cardio Ankle Vascular Index 変動の意義

戸谷 俊介（代謝機能制御系糖尿病・代謝・内分泌学）

指導教授：齋木 厚人（内科学講座糖尿病・代謝・内分泌学分野）

指定討論者：池田 隆徳 教授，本村 昇 教授，大平 征宏 教授

大動脈弁狭窄症(AS)の手術を受けた透析患者 41 例を対象に、Cardio Ankle Vascular Index (CAVI) の経時的変化と AS 進行の関連を後方視的に解析した。AS が重症化する 2 年前から CAVI は有意に低下を示し、 Δ CAVI は meanPG 上昇と有意に関連。ロジスティック回帰分析でも Δ CAVI は独立した予測因子であり、CAVI は AS 進行を早期に捉える補助的マーカーとなる可能性が示された。

11. 好酸球性多発血管炎性肉芽腫症の維持療法におけるメボリズマブと従来治療の比較検討

酒井 大輝（生体応答系膠原病内科学）

指導教授：南木 敏宏（内科学講座膠原病学分野）

指定討論者：大橋 靖 教授，亀田 秀人 教授，岸 一馬 教授

抗 IL-5 抗体のメボリズマブ (MPZ) は好酸球性多発血管炎性肉芽腫症 (EGPA) 治療薬である。EGPA 維持療法において MPZ と従来治療 (CT) の有用性を比較した。MPZ 群では 12 か月後の疾患活動性が有意に低下し、再燃率も CT 群より低い傾向を示した。累積グルココルチコイド (GC) 量および GC 毒性指数も MPZ 群で有意に低下した。MPZ は EGPA に対する有用な維持療法の選択肢となる可能性が示唆された。

H. 分科会報告

12. [東邦大学医療センター佐倉病院 内科例会] ネフローゼ症候群を合併した後天性血友病 A の 1 例

南 彩華（東邦大学医療センター佐倉病院 研修医室）

ネフローゼ症候群の診断で入院した 79 歳男性。入院中に広範な皮下出血と深部出血、APTT 単独延長が出現し、後天性血友病 A の診断となった。双方の治療となる PSL 1mg/kg の投与のみで両疾患は完全寛解に至った。患者は蛋白低選択性ネフローゼ症候群であったため、第Ⅷ凝固因子インヒビターの尿中漏出によるクリアランス促進の病態を想定し、統計解析や類似症例の文献的考察など、多角的な視点からその証明を試みた。

13. [東邦大学医療センター大橋医学会] 胃全摘後の超高齢者に対して EUS 下吻合部を介して胆管結石を除去し得た一例

田崎 洸平（東邦大学医療センター大橋病院 研修医）

症例は 92 歳、男性。繰り返す胆管結石性胆管炎に対する治療目的で当院に紹介となった。胃全摘後のバルーン内視鏡下 ERCP を試みたが難渋したため、EUS 下肝空腸吻合術 (EUS-HJS) を施行し、その吻合部から順行性にすべての結石除去に成功した。バルーン内視鏡を用いても治療困難な術後再建腸管症例の胆管結石に対し、近年、経消化管的な EUS 下胆道ドレナージ及び順行性結石治療の有用性が報告されている。

I. 研修医発表

14. サンゴ状結石による複雑性腎盂腎炎の 1 例

都甲 春佳 (研修医)

指導：繁田 知之 (総合診療内科)

36 歳女性。来院 8 日前より、夜間に 38℃を超える発熱を認め受診。発熱および膿尿があり、右腎双手診で圧痛を認めた。さらに、単純 CT 検査で右腎盂にサンゴ状結石を認めたことから、サンゴ状結石に起因する急性複雑性腎盂腎炎と診断した。サンゴ状結石とは、1 つ以上の腎盂および腎杯に連続する形態の結石を指し、通常は高齢女性に多く認められる。今回、若年女性におけるサンゴ状結石という稀な症例を経験したので報告する。

15. *Streptococcus gallolyticus* 菌血症罹患後に早期大腸癌の診断に至った一例

塚原 幸之介 (研修医)

指導：森 岳雄 (総合診療内科(感染症科))

Streptococcus gallolyticus は大腸癌との関連が示唆されているグラム陽性球菌である。本症例では同菌による感染性心内膜炎を契機に判明した短期間での内視鏡的变化を伴う大腸ポリープ及び大腸癌である。過去の文献的考察とともに報告する。

16. 糖尿病性ケトアシドーシスを契機に発症した眼窩・副鼻腔・前頭葉ムーコル症の一例

小山 桜華 (研修医)

指導：森 岳雄 (総合診療内科(感染症科))

ムーコル症とは、接合菌である *Mucor* 目により生じる日和見感染症であり、糖尿病性ケトアシドーシスを契機に発症することが知られている。本症は、通院を自己中断した 2 型糖尿病患者に起こった眼窩・副鼻腔・前頭葉のムーコル症である。高容量のアムホテリシン B 及びイサブコナゾールと外科的治療にて軽快した中枢神経ムーコル症として文献的考察とともに報告する。

J. 研修医発表

17. 鉄欠乏性貧血にビタミン B12 欠乏を合併した 1 例

河合 理花 (研修医)

指導：山田 篤史 (総合診療内科)

症例は既往のない 18 歳女性で Hb3.3 の貧血を主訴に受診された方です。ビタミン B12 低値と抗壁細胞抗体陽性を認め、悪性貧血を疑ったが、*H. pylori* 抗体陽性となり内視鏡所見と合わせて *H. pylori* 感染症による萎縮性胃炎と診断し、外来で除菌と鉄剤補充、ビタミン B12 補充を行っている。自己免疫性胃炎による悪性貧血と鑑別を要した、*H. pylori* 感染症による萎縮性胃炎により著明な鉄欠乏性貧血とビタミン B12 欠乏を認めた若年患者の 1 例を報告する。

18. 無菌性髄膜炎を合併した菊池病の一例

谷川 響（研修医）

指導：繁田 知之（総合診療内科）

23 歳男性。入院 14 日前から悪寒戦慄を伴う発熱と頭痛あり受診。その後咽頭痛や両側頸部リンパ節腫脹、血球減少、LDH 上昇を認め菊池病が疑われていた。入院当日激しい頭痛と嘔吐で救急搬送され、髄液検査で無菌性髄膜炎の診断となった。NSAIDs のみでは効果が乏しくプレドニゾロン 20mg を開始し症状は著明に改善したため漸減していった。無菌性髄膜炎を合併する菊池病という稀な病態を経験したため報告する。

19. 可逆性脳血管攣縮症候群の 1 例

井上 玲（研修医）

指導：繁田 知之（総合診療内科）

症例は60歳女性。突然発症かつバットで殴られたような激しい頭痛を主訴に受診した。シャワーで誘発されることや頭部MRIで脳血管の狭小化を認めることから可逆性脳血管攣縮症候群(RCVS)と診断された。治療としてベラパミルの投与を行い症状は徐々に改善し外来でのフォローに切り替えた。RCVSは脳出血やくも膜下出血を併発することがある一方で発症1週間は画像所見が正常なことも多く、早期診断のために繰り返し画像検査を行う必要がある。

K. プロジェクト研究報告

20. 敗血症マーカー プレセプシンの正しい解釈の方法について

中尾 三四郎（東邦大学医療センター佐倉病院 血液内科）

プレセプシン(PSEP)、プロカルシトニン(PCT)は敗血症のバイオマーカーとされるが、我々はPSEPが胆汁中に異常高値で存在することを報告した(CCA, 2021)。2021年12月から胆汁が採取された50例を対象に血漿(P)・胆汁(B)のPSEP、PCTの測定を行った。男/女 34/16人、年齢中央値 78.5 歳。中央値は PSEP (P/B) 1194/546 pg/mL、PCT (P/B) 0.54/0.02 ng/mL と B-PCT は異常高値を認めなかった。P-PSEP は胆道系酵素、PCT と有意な正相関を示し、蛍光染色にて CD14 と PSEP は類洞のクッパー細胞に陽性であることを確認した。

21. *Candida albicans* 菌体成分誘導マウス冠動脈血管炎の成立機序および Syk 阻害薬 の有効性に関する検討

浅川 奈々絵（医学部病院病理学講座（大橋））

Candida albicans 菌体成分マウス血管炎モデルでは心基部大動脈領域が高頻度に侵襲される。我々は以前、Syk 阻害薬が本血管炎を抑制することを組織学的に示した。しかし、病変形成過程については不明な点が多く、Syk 阻害薬が影響する機序の解明は不十分である。今回、血管炎誘導物質投与後の心基部大動脈領域の病理組織像、血清サイトカイン濃度について経時的に検討した。Syk 阻害薬による変化も踏まえこの成果を報告する。

22. ベイズ推定法 CT 灌流画像から得られる血流低下、脳血流到達速度遅延領域をもとに軽症脳梗塞に対する血栓回収療法の治療適応の検討

藤田 聡（大橋病院脳神経外科）

主幹動脈閉塞脳梗塞の急性期治療として経皮的血栓回収療法が推奨されている。本研究では、いまだにエビデンスがない軽症症例に対して Bayesian 推定法 CT 灌流画像から得られる脳血流低下、脳血流到達速度遅延領域と神経症状の変化を比較し、治療介入することでメリットのある症例を同定することを目的とし、本研究の結果は、軽症症例に対する血栓回収療法の治療クライテリア作成に寄与すると考えられる。

M. 大学院生研究発表

24. モノリス型スピンチップを用いた固相抽出によるヒト血中オレキシシン受容体拮抗薬の簡易迅速分析法の確立

青山 剛一（社会環境医療系法医学）

指導教授：黒崎 久仁彦（法医学講座）

指定討論者：佐々木 陽典 教授，赤羽 悟美 教授，根本 隆洋 教授

オレキシシン受容体拮抗薬（ORAs）の過量内服は、ベンゾジアゼピン系薬の処方制限に伴い、増加が予想される。過量内服による薬物中毒患者の重症度予測、治療法を考える上で、迅速な血中濃度の把握が必要となる。今回、抽出が簡便であるモノリス型スピンチップを用いて、ORAs の血中濃度測定法を確立した。所要時間は 40 分以内であり、既存の方法よりも迅速である。また、実検体も測定でき、臨床における有用性も確認できた。

25. Choroidal Blood Flow Dynamics as a Predictor of Efficacy in Diabetic Macular Edema Treated with Faricimab

田中 一史（高次機能制御系眼科学）

指導教授：堀 裕一（眼科学講座）

指定討論者：石田 政弘 教授，中島 耕一 教授，和田 弘太 教授

糖尿病網膜症に伴う糖尿病黄斑浮腫（DME）は視力低下の主因であり、抗血管内皮増殖因子薬が第一選択とされるが眼循環動態への影響は不明である。今回、未治療 DME 眼にファリシマブを投与し脈絡膜血流（CBF）を経時的に解析した。治療後、視力と網膜厚は有意に改善し、CBF は -0.23 と軽度低下したが血流への影響は限定的である可能性が示唆された（ $P<0.01$, fixed effects analysis）。

26. 心不全における心エコードプラ法を用いた肺動脈反射波圧の臨床的意義

小泉 貴洋（代謝機能制御系循環器内科学）

指導教授：原 英彦（内科学講座循環器内科学分野）

指定討論者：赤羽 悟美 教授，高月 晋一 教授，藤井 毅郎 教授

肺高血圧の診断基準は近年改訂されたが、心エコーによる後負荷評価の明確な指標は未だ確立されていない。我々は心エコードプラ法を用いて三尖弁逆流波形および右室流出路波形から右室圧曲線と流量曲線を推定し、肺動脈反射波圧を算出した。反射波圧は右室への後負荷を示す直接的な指標となり得る。本研究では、心不全患者におけるこの指標の病態評価および予後予測への有用性を検討した。

27. 自己免疫疾患合併非小細胞肺がんの臨床像を検討する後方視的研究

高島 健太（代謝機能制御系糖尿病・代謝・内分泌学）

指導教授：齋木 厚人（内科学講座糖尿病・代謝・内分泌学分野）

指定討論者：岸 一馬 教授，大平 征宏 教授，佐野 厚 教授

自己免疫性疾患を有する肺がん患者の臨床的特徴を明らかにするため、患者背景および免疫チェックポイント阻害薬 (ICI) の効果や有害事象、自己免疫疾患の急性増悪、予後に寄与する因子を後方視的に検討した。ドライバー遺伝子変異陰性例では、ICI の治療を受けた患者は受けなかった患者に比べ、有意に予後が良好であった。(median PFS: 2275 days vs 654 days, $p = 0.004$)。

28. 高校生におけるスマートフォン依存の前提因子：ゲーム・動画・SNS 依存の特徴比較

稲熊 徳也（社会環境医療系精神神経医学）

指導教授：根本 隆洋（精神神経医学講座）

指定討論者：端詰 勝敬 教授，村上 義孝 教授，狩野 修 教授

高校生 246 名を対象に、スマートフォン依存をゲーム・動画・SNS に分類し、前提因子をロジスティック回帰分析で検討した。気分調節目的は全依存に共通して関連した。ゲーム依存では男性、うつ、暇つぶし目的が、動画依存では不安、忍耐欠如、暇つぶし目的が、SNS 依存では女性、うつ、熟考欠如、楽しみ目的が有意に関連した。依存の背景にある心理的要因をアプリケーションごとに明らかにすることで、個別化された予防介入に繋がる。

令和 7 年 6 月 18 日 (水)

N. 研修医発表

29. 感染源不明のレジオネラ肺炎の症例

畑 晴菜（研修医）

指導：小松 史哉（総合診療内科）

症例 46 歳女性。発熱、頭痛、咽頭痛が出現し近医で COVID19 の診断となり対症療法にて経過観察となっていたが呼吸症状出現し当院救急搬送となった。COVID19 肺炎および細菌性肺炎の合併として治療開始し、その後尿中抗原検査にてレジオネラ抗原陽性、肺炎球菌抗原陽性を認めレボフロキサシンで加療を行った。レジオネラ感染について詳細な病歴聴取でも感染源は明らかでなく、今回文献的考察を加え報告する。

30. 腹痛の診断に難渋した症例

潘 家琳（研修医）

指導：小松 史哉（総合診療内科）

腹痛は臨床現場で頻繁に遭遇する主訴の一つであるが、年齢や背景により鑑別疾患が多岐にわたることや、患者による経過が様々であることから診断に難渋することも多い。今回、非典型的な経過をたどった IgA 血管炎の一例を経験し、継続的な観察と診察の重要性を再認識する機会となったため、その経過と治療について報告し、診断に至る過程について考察した。

31. リウマチ性多発筋痛症の診断に至った 2 例

吉田 愛友（研修医）
指導：小松 史哉（総合診療内科）

リウマチ性多発筋痛症の診断に至った 2 症例。
リウマチ性多発筋痛症（PMR）の診断に至った 2 症例を経験したが、PMR は病歴及び身体所見が分類基準として重要であり、2 症例ともに病歴及び身体所見を元に診断及び治療に至った。しかしながら PMR の診断には除外診断が重要であり、特に感染症および悪性腫瘍の除外が重要となることから、今回除外診断について文献的考察を加え報告する。

O. 分科会報告

32. 〔東邦大学医療センター大橋病院 外科集談会〕
肝細胞癌術後に発生した肝偽リンパ腫の 1 例

武藤 光彦（外科）

症例は 73 歳女性。肝細胞癌術後再発と診断され、腹腔鏡下肝切除術を施行したところ、病理組織学的所見から偽リンパ腫と診断した。偽リンパ腫はポリクローナルなリンパ球増殖を主体とした良性のリンパ増殖性疾患であり、主に眼窩、甲状腺、肺などに生じることが多く、肝に生じることが稀である。今回、肝細胞癌に対する区域切除術後のフォロー中に出現し、経過からは肝細胞癌再発との鑑別が困難だった偽リンパ腫の 1 例を経験した。

P. 大学院生研究発表

33. 妊娠初期における両親の新型タバコの喫煙状況と「つわり」との関係

秋山 実季（社会環境医療系衛生学）
指導教授：西脇 祐司（社会医学講座衛生学分野）
指定討論者：片桐 由起子 教授，村上 義孝 教授，長谷川 友紀 教授

新型タバコ（加熱式タバコ、電子タバコ）による妊娠への影響は知見が少ない。本研究は、妊娠初期の嘔気嘔吐（すなわち、つわり）に着目し、母親および父親の喫煙状況との関連を検討した。鎖肛の予防因子探索を目的とした症例対照研究の対照群から、必要な情報がそろった母親 1463 人のデータを解析した。母親の紙巻および新型タバコの併用はつわりがないことと関連していた（OR 2.07, 95%CI: 1.02–4.21）。

34. 術前 MRI による前十字靱帯の画像評価と後十字靱帯温存型人工膝関節置換術の臨床成績との関連

岩井 達則（高次機能制御系整形外科）
指導教授：中川 晃一（整形外科学分野）
指定討論者：高橋 寛 教授，池上 博泰 教授，堀 正明 教授

変形性膝関節症（OA 膝）における前十字靱帯（ACL）と後十字靱帯（PCL）の変性は関連するため、PCL 温存型人工膝関節全置換術（CR 型 TKA）の臨床成績に影響を及ぼす可能性がある。本研究では、OA 膝における術前 MRI の ACL 画像評価と CR 型 TKA の短期・中期成績との関連を検討した。ACL の intact 群は absent 群よりも術後中期の膝機能が有意に良好であった。